

音楽科

乗 富 章 子
今 井 直 人
橋 本 俊 彦

1 音楽科における知識創造とは

生活と音楽のかかわり
BGMの影響
音楽の潜在的価値

音楽は、私たちの日常のごく身近なところであって、生活に潤いを与える存在として欠くことのできない価値をもっている。そこには、音楽そのものを積極的に楽しむものだけではなく、BGM (BackGround Music) などによって、思考・感情が大きく影響されるという音楽の潜在的価値も含まれている。

音楽性
音楽を理解し、そのおもしろさや美しさを感じ取ること

学校教育における音楽 (以下、音楽科) は、音楽と直接的にかかわる教科学習を中心にして、様々な音や音楽に出会う場である。子どもは、音や音楽を表現及び鑑賞する活動を通して感受する心を日々育てている。その心の発達は、音楽的な技能の意欲向上にも深く結びついており、音楽の潜在的価値と融合することで、生涯学習につながる新たな音楽性として生きるものとなる。

音楽的スキーマ
音楽を表現・鑑賞するために必要となる経験と能力

音楽科の活動を進めるためには、子ども一人一人が音楽的スキーマをもち、音楽的な視点で友達と積極的にかかわり、ともに表現することでしか得られない気づきや喜びが大切となる。子どもは、音楽的スキーマの個人差を互いに認め合いながらも、新しい刺激として相互に作用させながら活動することで、個々に音楽的スキーマを培ってきている。

音楽性の高まり

子どもは、音や音楽から感じ取ったことを周囲に伝えるために、きれいや美しいといった漠然とした感想から、音色や旋律のある部分がどのような感じかという楽曲に即した細かな感想まで、言葉によって多くを表現する。しかし、音楽性は、感じたことを言葉で表す力のほかに、音楽的な感受力や表現の技能、鑑賞の能力も合わせて求めることで高まっていくものである。言葉ではうまく表せないことでも、音楽ならば伝え合うことができるであろう。

音楽科と知識創造

知識創造という視点で音楽科をとらえると、次のように考えることができる。子どもは、新しく音や音楽に出会うことで、音楽的スキーマや生活経験から何かしらの感想を抱くことになる。それを互いに言葉や音楽で伝え合う中で、新たな気づきが生まれてくる。子ども一人一人が音や音楽に対して主体的に向き合い、友達の表現するものを意識して聴き、何かを感じ取ることで、新たな知が生まれる。また、その感じ取り方にも個人差があり、互いに表出することを繰り返す中で、音楽性を高めることに結びついている。また、ともに音や音楽を表現する活動は、言葉では伝えることのできない新たな知を生み出している。

音楽科における知識創造の定義

以上のことから、音楽科における知識創造を以下のように定義する。

様々な音や音楽に自分なりの感じ方で向き合い 表現や鑑賞の活動を通して互いにかかわり合う中で 自らの音楽性を高めていく営み

2 音楽科における「かかわり」の活性化

音楽科のテキスト
・楽譜
・手本となる音素材 (範唱や範奏CD)
・副次的な音素材
「かかわり」を活性化
するツール

音楽科で扱われる多くの楽曲には、楽譜というテキストが存在している。楽譜には、音楽的スキーマをもって読み取らなければならないことも含めて、多くの情報が書き込まれている。しかし、「かかわり」を活性化するためには、子どもの楽譜を読み解く手がかりとなる範唱や範奏のCDなど音素材があり、さらに、これらをもとに友達が表現した鳴り響く音や音楽という副次的な音素材も存在する。これらすべてを音楽科のテキストととらえ、子どもが互いのかかわりの中から自らの音楽性を高めていこうと試みるためのツールと位置づ

読譜力のレベル

感じ方の個人差

音楽性の高まり

けることとする。目に見えない音楽を、楽譜をもとに読み解くステップとして、手本となる音素材があり、その音素材との比較となるべく副次的な音素材がある。つまり、すぐに楽譜に立ち返ってとらえ直す活動を展開するのではなく、段階的に理解しながら、最終的に楽譜につなげていく。

同じ楽譜であっても、音階やリズムを正確に表現できるようになる段階から、音楽の規則性を把握して、音楽的スキーマをもとに楽譜の行間を推察できる段階まで、個々の読譜力に差異が生じる。また、同じ楽曲を聴いても、感じ方に個人差が存在することから考えると、音楽の魅力や感受の多様性と向き合うために、相互にかかわることは不可欠であるといえよう。

音楽科における「かかわり」の活性化とは、テキストをツールとして有効的に活用することで、互いの表現（言葉によるもの、音楽によるもの、空気を伝わって感じるものすべて）から新しい刺激を得ながら、自らの表現に生かそうとしている状態ととらえる。受け手となって刺激を得ようとする立場ではなく、テキストをツールとして活発にかかわろうとする意識をもつことで、自らの音楽性の高まりにつながるものと考えている。

3 「かかわり」を活性化するために

子どもが、音や音楽により主体的に向き合い、様々な表現を出し合える環境を求めて、以下の手だてをもって「かかわり」の活性化をめざす。

(1) 教師が意図を明確にもつ

楽曲との出会わせ方

資料の有効活用

教師は、教材として、様々な楽曲の中からある楽曲を取り上げたいと考えるに至った意図を明確にもたなければならない。教師は、子ども一人一人、または総合的に現時点での音楽的スキーマを把握し、どのような音楽性を向上させたいと意図して教材曲を選定し、どのような授業スタイルをもって実現することが可能なのかという見通しをもつことである。その際、音楽科のテキストを活用しながら、どのような「かかわり」を想定することで、互いの音楽性を高めていくかを明らかにしていく。

例えば、子どもに楽曲を提示する場面一つとっても、どのような授業スタイルをもって楽曲を提示することが、子どもにより深い印象を与え、音楽活動への興味・関心を引き出すことにつながるかを吟味することが必要である。子どもが楽曲の世界に入り込みやすくするため、写真・資料の活用や楽曲にかかわるエピソードなどを紹介する。それは結果的に、以後の音楽活動における「かかわり」に、質的にも量的にも大きく影響を及ぼすものであるからである。

(2) 「かかわり」の有用性の自覚と差異への気づきを促す

互いに認め合う場

差異のとらえ方

楽曲を歌ったり、演奏したり、創作したりという音楽表現は、音楽科の中心となる活動である。子どもは、歌い方や楽器の演奏の仕方、読譜に必要な知識を理解する力を身につけることで、音楽のおもしろさや美しさなどをより味わうことになる。そのため教師は、子ども一人一人に表現させ、個別に支援を加える場を設け、それを同時に、個々の表現の良さを互いに聴いて認め合う場とする。これは、子どもが自信をもって表現できる環境整備であるとともに、「かかわり」の有用性を自覚する根幹となるものである。

その上で、友達の表現に興味をもち、その表現について、表現の仕方を聞いたり真似して表現したりすることで、自分と友達の考え方や音色などが、必ずしも同一ではないことに気づかせたい。また、この差異がすべて改善または協調しなければならない点ではないことを、「かかわり」を通して気づかせたい。具体的には、音程やリズムなど、音楽科のテキストに立ち返って、「かかわり」を通してそろえ合わせなければならないものと、声の質など個人差として互いに尊重し合うべきものがある。これらは「かかわり」の経験を通して、その違いを区別して理解する力も養っていききたい。

3 実践例 - 4年 -

(1) 題材 心を合わせて歌おう

～「三匹のいたずらねずみとかえるの合唱」「緑のそよ風」「まきばの子牛」～

(2) 本題材における知識創造

旋律・リズム・歌詞の特徴や意味を理解した歌い方を工夫して 歌うことの楽しさを味わうことができる

本題材は、歌のレパートリーを広げるとともに、学級の仲間と一緒に歌い方を工夫しながら歌うことでその楽しさを感じ取るために設定した。子どもは斉唱、輪唱、そして二部合唱と学ぶ中で、音の重なりの美しさを感じ取ることができ、併せて楽譜や歌詞カードの読み取り方や発想記号の意味付けなどテキストに関する学びも得ることができる。ここでは、「三匹のいたずらねずみとかえるの合唱」「緑のそよ風」「まきばの子牛」の3曲を学習する。

「三匹のいたずらねずみとかえるの合唱」は、「三匹のいたずらねずみ」と「かえるの合唱」のそれぞれが輪唱であると同時に、パートナーソングともなっている曲である。二つの輪唱を楽しみながら自然にハーモニーを感じ取ることができる。「緑のそよ風」では、教科書に掲載されている2番まででなく、原曲に示されている5番までの歌詞で斉唱をする。一文字一音で作曲された旋律の美しさを十分に感じ取ることができる曲である。一文字が一音であることから、発音と発声に注意すると同時に、歌詞を味わって歌うことも求められる。「まきばの子牛」は本格的な二部合唱への導入によく用いられる曲である。三度や六度の和音を中心とした曲で、ハーモニーの美しさを気持ちよく感じ取ることができる。歌詞からは情景が想像しやすく、子どもの感性にも合った曲である。

子どもにとって、歌うことは生活の一部になっている。とにかく元気よく歌う。大きな声で力いっぱい声を張り上げて歌う。その元気のよさを生かしながら、口をあける、発音をはっきりする、姿勢をよくする、お腹で呼吸をするなどの発声のスキルを身につけることができるだろう。また、中には歌うことへの抵抗を感じている子どももいる。口を十分に開けていない子が多い。それは照れであったり、自分は歌が苦手だと思っているからであったりする。一人では自信がなくても友達と一緒に歌うことで、自然に音楽の世界に入り、気分よく歌うことの楽しさを味わうことができる。

子どもが必要感を意識しながら発声のスキルを身につけるには、子どもが旋律の動きやリズムの特徴、歌詞の意味などの音楽的要素に着目できるようにすることが大切である。次にそれらを自分らしく表現するにはどうしたらよいか、友達はどうか表現しているかなど、視点を明確に示して表現や鑑賞を行う。そして工夫できる場所を見つけて学習の課題とする方法で学習を進める。また、音を聴き取る力をつけるための音楽ゲームを継続して行うことで音程感、和声感が養われるようにする。

これらの考えに立ち、上記の知識創造を設定した。

(3) 「かかわり」を活性化するために

①本題材における「かかわり」の活性化

本題材における「かかわり」の活性化とは、よりよい表現を求めて試行錯誤を重ね、音楽的に向上しようとしている状態ととらえる。具体的には、以下の状態である。

- ・ 楽曲に対して、旋律・リズム・歌詞を理解した上で、それら音楽的な視点を持って表現しようとしている。
- ・ 自分の表現と友達の表現を比較して、音楽的視点にたったよさを認め合おうとしている。

②本題材における「かかわり」を活性化する手だて

(ア) 教師が意図を明確にもつ

「三匹のいたずらねずみとかえるの合唱」は、音楽の構成こそ単純だが、楽譜にそって（他の声に惑わされずに）歌うのは、相当難しい。その難しさが子どもの意欲を生み出し真剣に楽譜を見ようとする。通常の授業では子どもにその役割を意識させにくい、楽譜とパートとして明確化する教室で歌う位置とが、同じパートをそろえて歌い、互いに聴き合う大切さを共有するための活性化の手だての一つである。2曲目は、「緑のそよ風」と「まきばの朝」から子どもに選曲させる。どちらも「日本の歌・心の歌」

として教科書に掲載されている。子どもが好きと感じた曲を学習することが、活性化に向かう方法の一つであると考え。「まきばの子牛」では、曲の初めから二部に分かれるために、音の取り方が難しい。しかしそれまでの2曲の学習や導入時での音楽ゲームなどを通して、音を聴き分ける力をつけておけば、前奏や伴奏から自分のメロディラインを聴き取ることができると思われる。音楽ゲームでつけた音を聴き分ける力を、「前奏から音をとる」ことに発展するようにしていくことをその手だてとする。

(イ)「かかわり」の有用性の自覚と差異への気づきを促す

○番の歌詞が好きな子同士でグループを作り、歌い方の工夫を考えさせる。子どもは、友だちと一緒に歌うことで安心して自分を表現することができる。子どもがだれかと「一緒だ」と思っている、実は一人一人の表現の仕方、表現そのものもそれぞれ違っている。その同じことをしていても違うというよさは、言い換えれば音楽的な要素に着目する視点は同じでも、表現そのものは個々のものであるというよさであり、考えた工夫を表現し、互いに聴き合うことで自覚できるものと考え。

(4) 学習計画（総時数6時間）

主な活動と内容	「かかわり」を活性化する手だてと意図
<p>1 「三匹のいたずらねずみとかえるの合唱」を歌う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽譜が4段に分かれているよ どういうこと？ ・「かえるの合唱」は知っているよ ・まずは上の段から歌っていきよ ・歌ってみたら楽譜の見方が分かったよ ・四つに分かれて歌うなんてできるだろうか ・だんだん楽しく歌えるようになってきたよ ・音が重なって難しいがとても楽しい歌だね 	<p>想起・表出・共有</p> <p>楽譜から教材曲に入っていくことはまれであるが、あえて楽譜を配付することから始める。ここで楽譜の「見方」を学ばせるためである。4段に分かれている楽譜から自分が歌うパートを見つけ、そこを目で追いながら歌うとよいことに気づかせたい。また、輪唱を楽しみながらパートナーソングになっているという曲の特徴にも気づかせる。</p>
<p>2 「緑のそよ風」2番までと「まきばの朝」を鑑賞し歌うならどちらを選ぶかについて話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どちらもさわやかな感じがする曲だ ・長い伴奏が印象的なものも似ている ・「まきばの朝」は昔風かな 光景がよくわからない ・「緑のそよ風」の方が歌いやすそうだ <p>3 「緑のそよ風」の歌い方の工夫をする</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の一番好きな歌詞を選ぼう ・歌い方を工夫してみよう ・工夫したことを歌詞カードや楽譜などに記録しよう ・歌詞を覚え工夫したことがわかるような歌い方ができるようグループで練習を重ねよう ・他のグループの表現を聞こう ・\leftarrow や \rightarrow の工夫もあるよ 	<p>想起</p> <p>どちらも「日本の歌・心の歌」として紹介されている曲である。昭和初期から終戦直後に作曲された古い歌だが美しい旋律と豊かな表現で書かれた歌詞になっている。両方のよさを感じ取りながら鑑賞した上で、どちらを学習するか決めさせる。</p> <p>表出・共有・結合</p> <p>まず、1番から5番までの中で自分の好きな歌詞を選ばせる。選んだ時点でグループが出来上がる。そのグループで歌い方の工夫を話し合い、記録する。またその歌い方を試し、練習を繰り返す。その成果を互いに聴きあうことになる。自分の工夫に自信を持つと同時に、他から学んだことを次に生かすことができるようにする。</p>
<p>4 「まきばの子牛」を二部合唱する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろんな工夫ができそうな歌だね ・一番初めから二部に分かれているよ ・前奏を聞いていると初めの音がとれるよ ・メロディがおいかけてっしているところがすてき ・そこは歌詞もおいかけてっしているね ・牛が知らん顔して怒っているのかと思う歌詞がおもしろい ・わたしは3拍子のリズムを体で感じて歌いたい ・伴奏や指揮も自分達でできるかな 	<p>想起</p> <p>これまでの学習を活かして上手に音を拾いながら二部合唱に取り組ませる。</p> <p>表出・共有</p> <p>歌詞、メロディ、拍子など音楽的要素に着目しながらよりよい表現をめざして練習に取り組むようにする。</p> <p>結合</p> <p>伴奏や指揮も含めて自分達で演奏し、他のクラスと共に「まきばの子牛」発表会を計画し、実行できるようにする。</p>

(5) 本題材における授業の実際と考察

音楽科の論では「かかわり」を活性化するために、次の二点を手立てとして挙げた。

(1) 教師が意図を明確にもつ

(2) 「かかわり」の有用性の自覚と差異への気づきを促す

これらの手立てによって、めざす知識創造が充実したかどうかについて本実践を考察する。

その方法として、①で本題材の第4時（以下本時）の子どもの様子を見取りから、②では「かかわり」の有用性の自覚と差異への気づきについて抽出見などの様子から考察する。

① 授業で見られた子どもの様子を見取り

その1 活動への教師の意図と子どもの様子

(ア) ウォームアップ

意図 授業へのウォームアップと同時に、子どもが互いのパートの音を聴き合いながら自分のパートの音を正しくとって歌うことができるようにする。

今月の歌のあと、本題材での既習曲「3匹のいたずらねずみとかえるの合唱」を歌う。この曲は四つのパートに分かれている。これまでの学習で子どもは自由にパートを選び、場所を移動して歌ってきた。本時では、「今まで あまり行ったことのないパートへ」と指示した。何回も歌っているのに途中でどこを歌っているのかわからなくなった子どもはいなかったが、あえて経験の少ないパートを選ばせたが故に、この曲の一番要である最後の2小節の音程が教師の予想した通り、不安定になってしまった。

本実践では、楽譜が表現の完成にどれだけ重要な役割を果たすかを試す意味も含んでいた。「3匹の…」では、楽譜どおりに歌うことによって自然に四部の和声を経験させたかったが、4年生という発達段階を考慮すると、和声を即自的なパート選びと自分達の「かかわり」だけをもとにして創るには技能的にまだ難しかったのではないかと反省する。

(イ) 5番までの歌詞のある楽譜を配付

意図 5番までの歌詞を初めて見て、自分の好きな○番を自己決定させる。

教科書には「緑のそよ風」は2番まで掲載されている。さわやかで軽快な旋律なので、子どもは気持ちよく斉唱することができていた。本時、初めて5番までを提示する。

楽譜を渡すと、子どもはすぐ口々に歌い出した（写真1）。そこで、「表出・共有」のための手立てとして、自分の好きな○番を選んで歌うことを知らせて、本時の学習への見通しをもたせた。そして第1フレーズの歌詞が全て共通で「みどりのそよ風 いい日だね」であることから、その歌い方について全員で話し合うことにした。



写真1 楽譜に見入る子ども



写真2 課題の提示

(ウ) 第1フレーズの歌い方についての話し合い

意図 自分の考えをもつことの大切さに気づかせる。

「そよ風」の「そ・よ・」の部分は、楽譜では八分音符と八分休符で示されており、やや軽く切りぎみに歌うところである。しかし、それは楽譜を「読む」ことで理解されることであり、子どもの感性は必ずしもそうとは限らない。一部の子どもは、何回か歌って試した結果「切らずに」（レガートで）歌うことを主張した。

教師はそこで楽譜には敢えて触れず、「今の意見のように自分はこうしたいと考えて、工夫の仕方を

話し合ってみましょう」と本時の課題を提示した（写真2）。

（エ） 歌詞カードへの書き込み

意図 自分（達）の思いを確かめ表現する

先の「3匹の…」では、4年生の発達段階から見て、楽譜の限界を知った。そこで本時では2フレーズからの歌詞を大きく書き出した紙を「歌詞カード」として子どもに渡し、そこへ自分達の工夫を書き込むようにした。文字で書き込むのはもちろんだが、これまでの学習を通して、ピアノ、フォルテ、クレシェンド、デクレシェンドなどの記号とその意味を学んでいるので、それらもどんどん取り入れることを促した。



写真3 楽譜や歌詞に書き込む子ども

その2 グループの「かかわり」の様子

次に、グループの構成とその様子の見取りについて考察する。

（ア） グループ構成

○番を選んでそのメンバーによるグループができる場面である。本時はまずこのグループで自分たちの思いを共有する。歌詞を選んでのグループ作りということで、ある子どもは素直に自分の気に入った○番を選んで移動し、またある子どもは、仲良しの友だちと相談して決めていた。

その結果、1番には音楽的能力の高い女子が4人。このグループは教師の支援をあまり必要としないと思われるので黙って見守ることでよいと考えられた。2番は、積極的ではないが誠実に話し合い、意見を上手にまとめようとする女子5人。ただこのメンバーには正しい音程をとりにくい子どもがそろっている。発表にはさりげなく伴奏をいれるなどの配慮が必要。3番は、歌詞が野球の様子を歌っている。男子に人気が集まるということが予想されその通り、野球教室に入っている子どもをふくめて6人の男子がそろった。4番も魚釣りを歌った歌詞でこちらも男子が9人。5番は、女子のグループになった。こちらは、音楽は大好きだが、ふだんから自己主張が強く意見の対立は免れないと思われた。

結果的に、男子と女子ではっきり分かれたグループ構成になった。できれば男女が混ざったグループになると様々な意見が出てよいのではないかと考えていたが、大切なのは、その後の表現をどう創り上げようとするかの活動なので、グループの構成については特に取り上げず、そのまま活動に入ることにした。

（イ） 3番グループの「身体表現」

このグループは歌詞の「ストライク」「セーフ」「おでこの汗をふく」をジェスチャーで表すことを工夫ととらえたようだった。いわゆる身体表現とは異なるが、一応拍の流れを意識した動きとなっていたため「表現の工夫」として他の子どもから認められた。全体的にはA児の言葉通り「野球をしているので元気に歌いたかったし、歌えた。」という様子を見て取ることができた。

（ウ） 中間発表

自分達の思いや工夫したことを書き込んだ歌詞カードをもとにして、工夫したところを発表してみる。書き込みだけでなく、発表の前に言葉で説明してもよし、いきなり歌って聞いてわかってもらってもよし、という約束で発表を始めた。教師としては、グループの表現の中に個々の思いが息づいていることを願っていた。また、聴く側もその工夫を理解し、共感してくれることを期待していた。

1番グループは、メゾピアノやメゾフォルテをきちんと書き込んでいねいに歌っていた。2番グループは小さくメロディの伴奏をいれることであまり音を外すことなく歌うことができた。3番グループ



写真4 工夫を書き込んだ歌詞

は前述のとおり、歌詞を身体表現しながら歌った。4番グループは意見がまとまらなかったが、結局は「明るくにこにこしながら歌う」ことに落ち着いたようだった。

(エ) 5番グループの確執と発表に至るまで

このグループは先にも述べたが、音楽好きではあるがなかなか個性の強い児童が集まった。グループの話し合いは、テンポのことが中心になっていた。B児は「もうじき いちごも つめるとさ」のところは軽快にややテンポを速くして歌ったらいいと発言した。ところがC児は、「歌詞で言うところのあとのことだし(もうじき)、5番が最後なのだから、ゆっくりめに歌う方がいい」と主張した。もしかしたら、楽譜に小さく書いてある *poco rit.* を理解していたのかもしれない。さらにD児からは、二人の対立を聞いて「じゃあ、間をとって適当な速さにしたら」との発言もあった。いろいろ言いあっている途中で練習の時間が終わってしまった。

5番グループが発表する。テンポのことでもめたことをまず話し始めた。B児は「私の考えをちゃんと聞いてくれない」と涙ぐんでいた。するとC児が立ち上がり「私は終わりの方で速さを変えてゆっくり歌いたいんだけど…」と説明しかけ、テンポを具体的にわかってもらうために歌い始めた。C児は普段の授業では自分から発言をしないことが多い。また、協力することが苦手で一人の方が何ごともうまくいくと思っているらしい。ごく限られた友だちと仲良く遊ぶ。教室でも「かかわり」を最も活性化させたい児童の一人である。

C児は曲の終わりの方でわずかにゆっくりと歌った。歌声はすばらしく、まわりから大きな拍手が起こった。そしてB児は「これからの速さなら私も賛成できる」と話し、ようやく穏やかな表情になった。テンポは指示されない限り、「ゆっくり」や「速く」などの感覚は人によって様々に受け取られる。C児の誠実でていねいな歌い方がB児の心を動かしたものと思われる。またC児もクラスの大勢から拍手を受け、とても嬉しそうにしていたのが印象的だった。以後C児は歌に積極的に取り組んでいる。



写真5 友だちの表現を聴く子ども

② 子どもは「かかわり」の有用性を自覚し、差異に気づいたか

(ア) 本題材の「かかわり」について

本題材の授業において何を「かかわり」と見るか。一つはグループ相互の「かかわり」であり、もう一つはグループを構成する個々の「かかわり」である。それも、必ず「音」「音楽」に関連した「かかわり」である。本時の課題は「歌い方を工夫しよう」というものであり、自分が好きで選んだ○番の歌い方を工夫するので、グループ内には、「歌い方」について様々な思いがあって当然である。教師は、授業者としてまずグループ内で個々の思いを出し合うことを「かかわり」の第一段階ととらえていた。その後、自分のグループの意見や表現を交流しながら、共感したり、批判したり、ヒントをもらったりすることが、第二段階の「かかわり」であると考えている。



写真6 E児のグループの発表

(イ) 子どもは「かかわり」の有用性を自覚できたか

抽出児Eは男子で、他の教科の授業も含めてつぶやきは多いが、自己主張より他児に追随することの方が多き児童である。本時、「三匹の…」の時も、自分の好きな○番を選ぶ時も、まわりの様子を見ながら何となく決めていた様子だった。E児は、結局4番を選んだ。移動後はグループ内の子どもと盛んに意見を交換し話し合いの中心になっていた(資料1)。

E児はまた、5番グループの発表のとき、初めは隣の子とも私語を交わしていたが、前述のC児が歌い始めるとじっと聞き入り、その後の教師の話をしっかりうなずきながら聴くことができた。

E児：この辺、ピアノ、使う？
 F児：しずかな・・・のところ、メゾピアノ？
 E児：水色でアンダーラインしよう
 G児：はねあげて はクレシエンド？
 E児：いいねえ！（歌ってみる）
 H児：どう書くんだった？
 I児：こう（書きながら）するんだよ
 E児：みんなで 歌ってみよう！いい！これにきまりだ！

資料1 E児のグループの話し合いから

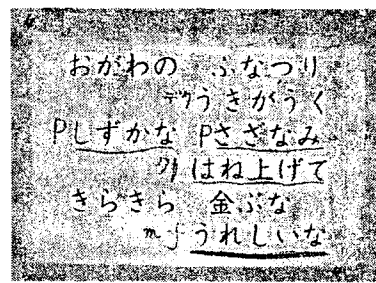


写真7 資料1の部分の書き込み

自己決定に迷ったり、集中が途切れてしまったりしがちな子どもにとって、「かかわり」は授業に主体的に参加するための大切な要因となることをE児の様子から判断できる。

(ウ) 子どもは差異に気づいたか

抽出児Jは女子で、いつも真面目に誠実に授業に参加できる児童である。J児はすぐに3番を選んだ。3番グループは、性格的には穏やかだが歌うと少し音程がずれてしまう子どもが4人そろってしまった。授業記録によると、J児は教師の発問や働きかけに即座に応じ、挙手も盛んにしている。課題への取り組みの様子を見ると、同じグループのK児、L児、M児の中心になって歌いながら相談し、フォルテなどの記号を書き込んでいた。

グループ発表を聴く時は、集中して聴き入り、自分達の工夫の仕方との同じところ、違うところを見つけて友だちと確認し合う姿が見られた。

また自分達の発表の時には、「ぶらんこ ゆりましょ うたい・ま・しょう」のように「・」を休符として表し、メゾフォルテで歌うこと、「すばこの まるまど ねんねどり」は対照的にメゾピアノで歌うことを全員の前で説明した上で、歌うことができた。他のグループの工夫とは違うよさを自分達で見つけることができ、「かかわり」を意識した学習スタイルが効果的であったと考える。

(6) 成果と課題

音楽科での「かかわり」を活性化するための手だては、子どもが音楽により主体的に向き合うために設定したものである。

その一つ「教師が意図を明確にもつ」は、実際の授業場面で常に念頭に置いて指導することが大切であることを学んだ。また、教材を決定するときに「どんな力をどの活動で子どもにつけていくか」を考えるためにも大切であることを実感した。本実践では三つの教材曲をどのように配列すれば学んだことを次に生かし、より充実した知識創造を生み出すことができるかを考える手がかりになり得る。

具体的には、本題材の三つ目の教材として選んだ二部合唱曲「まきばの子牛」の学習で明らかであった。この曲は教科書の巻末に掲載されており、ダイナミックスなども子どもにわかりやすく示されている。初めから二部合唱になっていて取り組みやすい。この曲に入るにあたって、7月に学年で発表会をもつことを伝えたこともあって子どもはとても意欲的に取り組んだ。楽譜からテンポの指定、クレシエンド、デクレシエンド、メゾフォルテなどを見つける、歌詞から大切にしたい言葉を選ぶなど、教師の細かな指示を待たずに子どもが率先して活動を行い二部合唱に仕上げることができた。発表の場では、初めてア・カペラで歌い、音程の取り方や互いに聴きあうことの大切さを十分に感じていたことがうかがえる。

二つ目の『「かかわり」の有用性の自覚と差異への気づきを促す』についてでは、一人ではどうしたらよいかわからなくなるような場面で、友だちと共に考え、話し合ったことを書き込み、表現に生かしていくことで子どもの授業に臨む姿は確実に変容していった。このことは、上記の「まきばの子牛」の実践でも、互いの意見や表現の違いを認め合い「歌って確かめよう」という活動の積み重ねで発表会へこぎつけた子どもの様子からも十分に見て取ることができた。

したがって、この二つの手だてによって、本題材に向けて設定した知識創造が見られたと判断できる。

どんなに頭で理解し、友だちと協力しあっても、結局は「表現できた」という技能面で子ども自身が満足できる状態にならない限りこれらの手だてが本当に有効に働いたかどうか判断できない。「かかわり」で得た喜びが個に戻ってこそ真の知識創造が生まれるのではないかと考えている。